

旧峯岸家

大沢の里水車経営農家

Former Minegishi Residence
Mitaka Osawa-no-sato Waterwheel farmhouse

160年間、水車が暮らしの中心にあった農家

東京都三鷹市の旧峯岸家は江戸後期から昭和43年までの約160年間、川の水をエネルギー源とする動力水車を使い、精穀・製粉を主な稼業としてきた農家。その建物からは水車と暮らしの様子が伺え、最盛期、市内に11台あった水車の文化を今に伝える貴重な遺構となっている。



水輪の両側に杵や臼、ふるいを備え、水でつくったエネルギーを多様な仕事に変換する。作業時、直径4.6mの水輪(右)は毎分10~12回転した



「大沢の里 水車経営農家」として野川沿いで公開されている旧峯岸家。かつて、武蔵野には田畑が広がり、豊かな水量を誇る川に水車が点在していた



回転し、なで棒で杵を持ち上げる横心。屋敷林のケヤキを用いることもあった。高価な木材なので、摩耗の激しい部分だけを交換できるように工夫し、日頃は家人が修理した



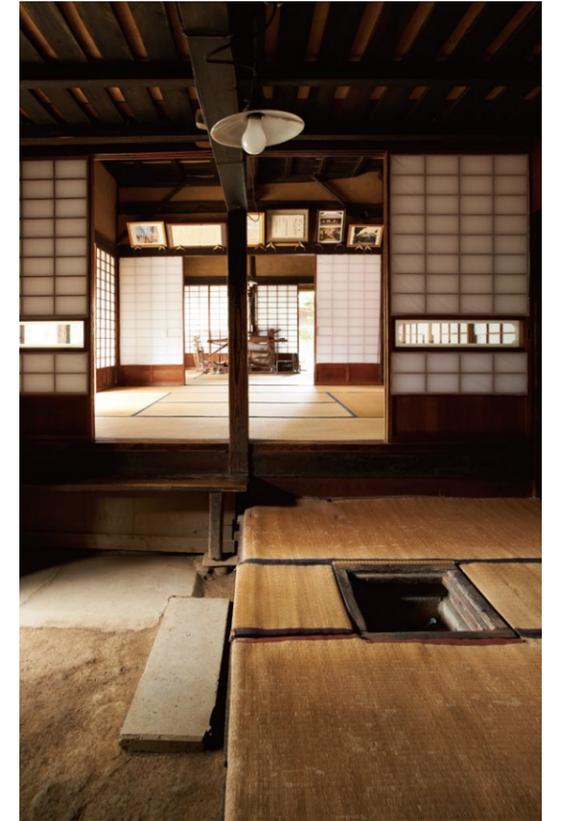
茅葺きの主屋。江戸後期の農家としては小型の建物。東向きのため、屋敷林が多かった頃は短時間しか日が差さなかった。養蚕を始めたため縁側をつくりスペースを確保した



座敷(手前)と広間。あとの2部屋もそれぞれ4畳ほどの広さで、全体に簡素な造り



元はどの部屋にも天井は無かったが、養蚕用に板の子を張った

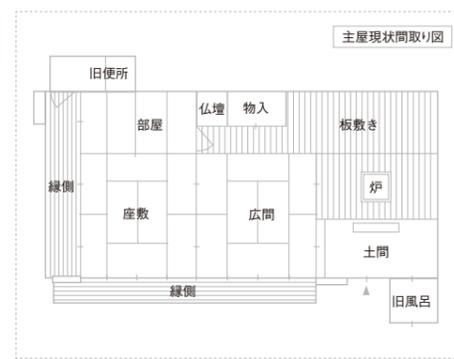
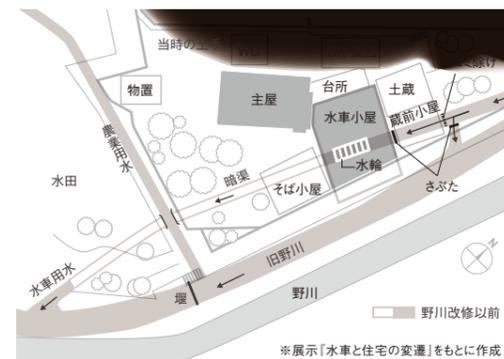


土間からかまどを移設し、炉を切った板敷きの間を設けたり屋根裏部屋をつくらして、その時の暮らしに便利ように改築した

江戸時代、大都市・江戸を間近に控えた武蔵野(現在の三鷹市など)では米や麦が盛んに生産された。後期には水車による精穀・製粉を商売とする者が現れ、峯岸家がある大沢の里の野川にも多くの水車が建設された。大沢村の名主などが文化5(1808)年頃に建設した水車が、峯岸家の所有となったのは9年後のこと。峯岸家は水車経営に重きを置き、住まいも野川沿いに構えたが、背後に土手の迫る限られた敷地で主屋は日当たりが芳しくない東向きを強いられるとされる。主屋は四間取りの農家の造りだが大黒柱

がなく、柱の細さが目立つ。文化10(1813)年頃に建てられたと伝わり、一説には、水車番の小屋を転用したために、そうした特徴を持ったとする見方がある。水車番は、水路のさぶたで水量調節をしたり、ゴミが流れこんで水輪を壊さないように寝ずの番をしたりした。一方、水車小屋は昭和43(1968)年頃の野川改修時に建て替えられるまで主屋を超える規模で、日本有数の動力水車を収め、水輪脇では穀物の袋詰作業もできた。峯岸家は明治後期に養蚕も手がけるが、主屋が作

業場と化す繁忙期には、水車小屋に家族が揃って寝たというエピソードも残っている。米や大麦、武蔵野で良く食べられたうどんの原料、小麦。それらを精穀・製粉する杵や搗き臼、挽き臼が水車の生みだす力で動いた。秋や冬には大麦、夏には小麦の取り扱いが多く、水車は休みなく回り続けた。それはすなわち峯岸家の忙しさであり、いつも水車の音が暮らしの中にあつたと5代目の故・峯岸清氏が回想している*1。旧峯岸家は水車停止後も良好に保存され、近年、東京都の文化財に指定されている。



用語説明

【さぶた】水量調整用の仕切り板。野川から引き込んだ水は上流で別の水車を動かし、次にここへ流れてきた。水量が多過ぎると、川沿いのさぶたを上げて水を逃した

*1「水車屋ぐらし 武蔵野(野川流域)の水車経営農家生活誌」(三鷹市教育委員会)より